第 23 回 AAF 戯曲賞選評

廣川麻子

ろう者が音声を中心とした演劇を鑑賞する際は、字幕か手話通訳を介することになる。もちろん、聴者と同等の鑑賞体験を得られることを目標としてそれらのアクセシビリティは付与される。今回わたしは、アクセシビリティを付与した上演を前提として、ろう者、難聴者が理解できる、作品に入ることができそうだ、という視点を持ちながら、戯曲を読ませていただいた。

しかしながら、音声という力（ちから）は想像以上に大きく、それを思い知らされたのが、今回の審査会であった。とりわけ、大賞となった『いみいみ』について議論を深める過程で、改めて感じた。

当初、わたしは『いみいみ』をまったく推さなかった。その理由は、「ＡはＡ」という構成が続く、というより、Ａ の部分が単語になったり、文節になったり、文章になったりしても、かならず、「は」でつなげている。それは最後まで続いている。もちろん、その内容は少しずつ意味を形作っており、イメージを想起させるものがある。Ａ　は　Ａ が果たしてそうなのか、感情が変わってくる感覚もある。「は」の前後にスペースが入ったり、入らなかったりしているが、そこにどのような意味を込めているのか。間が入るこことで、少し印象が変わってくるが、文字として読むとき、スペースが入ることで読みやすくなるのは確かであり、何度も読めば読むほど、その良さは伝わってくることは理解した。

とはいえど、上演したときにどのような形態となるのか想像ができず、文字、あるいは手話を追うだけになるのではという懸念、ろう者として作品が伝えたいテーマが伝わりにくいのではと危惧した。会話となっている作品のほうが良いと思い、ほかの作品を推した。

しかし、聴者の審査員がこのセリフから情景が立ち現れてきたと評価したことに、ろう者と聴者の身体性の違いを感じた。書かれている言葉（せりふ）が声になり、耳で、聴覚として感じることと、視覚的な字幕や手話で受け止めることは、おそらく違う。

ではなぜ、最終的にこの作品を推すに至ったのか。あと付けではない、アクセシビリティを考慮した上演に挑戦する価値はあるのではないかと思い至ったからだ。どのような表現がこの作品の魅力を伝えられるのかを期待したい。

『Plant』

チップをマイナンバーの進化形のように感じた。合意を目に見える形で取ることで、人間関係のリスクを避けようとしていること、また自分の感情を可視化して、「通知」する仕組みは面白いと思った。いわゆるモラハラやパワハラなどをする本人の自覚を促すのは難しいと言われるが、それをデータとして可視化するという点にユニークさを感じた。

その一方で、自分の感情は果たしてデータとして可視化されるものなのか、可視化することで失われるものもありそうな気がした。植物化することは、人間の欲望が極端な形にいくと人間でなくなることのメタファーであるように感じた。ラストは束縛から解放する希望を感じた。

『良いキャンペーン』

広島や福島などを想定しているのだろうか。いわゆるスタディツアーとして過去に学ぶということは今でもよく行われるが、未来の人が現在の状況から学ぶとしたらどんなふうに見えるのか、という設定は面白い。

五感が閉じられていく設定については、ALS を想定しているのだろうか。実際にその病気があるので、少し慎重に取り扱った方がいいようにも思った。

登場人物の若い女性の話し言葉が会話として意味をつかみやすく、容易にイメージすることができた半面、時代設定が行ったり戻ったりしていて読みながら混乱してしまった。カラフルに場面設定するアイディアは面白いが、上演の際にどのようになるのか、想像がつかなかった。

『Fusion, （フュージョン、）』

当初、リョウは男だと思っていたが、女かも、いや、男？と混乱した。あえて性別を明確にしていないところも性的志向の多様性を表現しているのだろうか。また若者たちの生きづらさ、暴力やセックスでしか人と繋がれない悲しみのようなものを感じた。シェアハウスという閉じられた空間での人間関係もまた、苦しそうである。ろう者などマイノリティのコミュニティでも狭い範囲であり、少し似ているかもしれないと感じた。依存とは何か、共依存とは、と考えさせられた。ただし、暴力的な描写が多く、上演したとき、決してそれは本質ではないが、暴力を肯定しているようにも受け止められてしまいそうである。

『落ちる』

奇想天外ながらもイメージしやすい具体的な場面が続き、テンポよく、楽しく読むことができた。ただ、戯曲として指定している俳優と役が次々に入れ替わるため、読みながら混乱してしまった。どこからどこへ落ちるのか、比喩としての落ちるだけではない、あるいは物理的に落ちているのかも知れない、浮遊感がありつつもそんな怖さが見えた。

一方で、ろう者として気になる描写があった。登場人物の男が連れている犬がハローワークで盲導犬という仕事があるといわれ、それならと男は自分の目玉を取り出してしまう。また注意されたとき「え、ちょっと聞こえません」と言ってしまうのは、たとえ比喩だとしても、障害者を軽く扱っているように感じ、あまり気持ちの良いものではなかった。